



1985年(昭和60年)

4月号(No. 478)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価一部 150 円

目次

- 自然エネルギーの利用について
鳥居 亮……………(1)
- 海外の山……………(2)
- 「中国青藏高原の山々」「アメリカ
山岳会アラスカ支部との交換」
カタカナの山名・地名山岳用語
海外委員会……………(3)
- 山の恥もかき捨てでは困る
手塚宗求……………(4)
- もっと山の歌を 原 真……………(5)
- 図書紹介……………(6)
- 「続・大雪山わが山」他2
東西南北……………(8)
- “木暮翁神前祭への誘い” 他
報告……………(8)
- 青森・道南地区談話会, 信濃支部,
北海道支部
- 山の気象と気象講座(3)
科学研究委員会……………(8)
- 洋書購入のお知らせ 図書委員会……………(9)
- 八十周年記念募金応募者ご芳名……………(10)
- 会務報告・ルーム日誌・会員移動……………(10)
- お知らせ……………(11)

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

お知らせ電話

234 六六五九

自然エネルギーの利用について

—風力・水力から太陽光との複合利用へ—

鳥居 亮

今は亡き折井健一さんのお世話で、山岳地域におけるクリーンな自然エネルギーの利用に関する研究実験を始めて四年目を迎える。

二十四年前、穂高岳山荘の初代今田重太郎さんは笠ヶ岳、双六、南岳の各小屋と風力発電を試みられた経緯がある。二代目英雄さんは八年前から再度風力発電を手がけ、数年にわたり種々のアイデアと試行錯誤を繰り返された。風が制限速度を超えると、プロペラは過回転して発電機は焼損するので、強風を制御して克服して実用化に漕ぎ着けられた。親子二代にわたる発電への執念は、手作りの水車によって白出小屋の水力発電をも達成されたのである。

私の研究室の風力発電装置(以下

五十六年夏、折井さんのご提案で丹水会(名称は後年つけられた)が発足し、同年秋紅葉の佛果山登山と水没前の宮ヶ瀬行が丹水会の第一回の山行であった。それからは折井さんと勤務地(厚木)が同じことも幸いして、朝夕小田

急の中でお話しする機会もふえ、折井さんご自身もクリーンな自然エネルギーの利用に関心が深く、また当方の風車と全く同種のものが穂高岳山荘にあることも解り、このようなご縁で穂高岳山荘の風車の性能向上に関する実用実験の橋渡しをしていただいた。かくして自然エネルギーの利用に関し穂高岳山荘との協同研究が始まるのである。

穂高岳山荘は東西の風の通路になっている白出の谷にあって、西風が九〇%を占めている。自記風速計の記録によれば、台風時は秒速六、七十メートルになることもあり、また三、四十メートルの突風が吹くこともある。風車は山荘の西側に設置され、表玄関(東側)から見えることもなく、

自然の景観を損わない配慮もなされている。

登山者の多い七月中から八月にかけては、風は一年中で一番弱いが、電気は最も必要な時期であるので、弱い風でもよく廻るプロペラを設計の重点項目として、プロペラの断面形の選択と適切なねじり角を計算して製作した結果、オリジナルのプロペラを使用した場合に比べて、初年度(五十七年)には二倍、次年度(五十八年)には二倍半の電力を得るに至った。この風力発電で得た電力が登山者の増える七、八月を除き、穂高岳山荘が使うほぼすべての電力を賄うまでになっている。この電力は十四個の蓄電池に貯えられ、蛍光灯、常夜灯、ステレオ、無線電話、テレビ、ミシン、ポイ

あるメーカーが模型試験に使用した小さなベルト水車(出力二キロワット)を譲り受けて、十数年の間、学生の教材にしていたが、再度お役に立てることになった。濁沢岳雪渓の天命水を四〇立方メートル貯えている山荘では、五時間の運転しかできず、白出小屋は流量不足、漸く枯平において一・二キロワットの発電に成功し

みんなで八十周年記念事業を成功させよう!

今年もまた上高地山研で逢いましょう！

た（現在撤去して次の出番を待っている）。その後、白出小屋ではある種の小型ポンプの逆回転により二〇ワットの電力を得た。

七、八月には天気の良い無風状態が四、五日も続くことがある。こんな場合の電力を確保するため、同僚で会員の森武昭さん、重村清さん等の全面協力を得て、太陽光発電の実験を開始した。昨年七月出力八〇ワットのモジュール一基と日射量の自動計測装置をセッとした。これは山岳地域における日射量と日射時間の測定データが皆無のため、これらのデータを蓄積していくことにより、システムの最適設計を行なう上での基礎データを得るためである。八月末にはさらに三基を増設して、最大出力三二〇ワットとした。この装置で太陽光発電利用の可能性を確認することを目的としている。

今年は風力、太陽光発電とも設備を増強して両者がお互いに補い合うシステムとしての実用化を実証したい。前者は一・二キロワット一台、六〇〇ワット二台、後者は約一キロワットとし、百名分の電力が賄われる予定である。

この外、笠ヶ岳山荘では太陽光発電単独の実用試験を行ない、その利用価値を検討する。規模の大

きいヒマラヤ登山隊は出力八〇ワット程度の太陽光発電を行ない、気象情報用ファクシミリで高層気象を捕え、登頂に役立てているが、山小屋の場合は第一に採算性を考慮する必要がある。双六小屋では小規模ながら風力、太陽光の複合利用と、登山客の増える夏期は雪渓の雪解け水を利用して、ミニ水車による発電を計画している。つまり風力、太陽光、水力の三エネルギーのトリプル利用ということになる。

三千メートルの穂高岳山荘では平地に比べて日射量が多いため、太陽光による発電量は一二〇％確実であるが、空気が希薄なため風力による発電量は七〇％止りである。しかし夜通し可動することが多く、風車は穂高山荘一の働きものだ。発電機用の燃料費はヘリ輸送のため平地の三倍につく。風力発電により燃料の三分の二を節約している。太陽光発電はその取扱いは風力発電に比べて遥かに容易であるが、まだまだ割高である。水力の利用が最も安上がりである。風を利用した焼却炉によりゴミを完全燃焼させ、熱交換により蒸気を生じさせ従業員の風呂を沸かす。以上は実状であって、やがては山小屋の省エネに益するで

海外の山

中国青藏高原の山々

この三月中国青海省を訪ねた折、チョモランマ（珠穆朗瑪）、シシャバンマ（希夏邦馬）などをかかえる西藏自治区に較べ、あまり知られていない青蔵高原の山々について青海省登山協会から聞く機会があった。

青海省で有名な山は何といってもアムネマチン（阿尼瑪卿、六二八二メートル）である。手違いから一時はエベレストより高い山、とされてしまったこの「幻の九千峰」は八一年、日本の上越山岳協会隊に登られたが、青海省登山協会自体前年の八〇年に発足したのだから、アムネマチン峰開放のために作られたようなものだった。八四年長野県山岳協会の日中合同隊がⅡ峰（六〇八二メートル）に登頂しているが、そのほかにフランス、イタリア隊が繰り出している。こちらの方は登山協会に言わせると「登山というよりは探検が目的」でアムネマチン山麓を一周する一種のトレッキングを兼ねていた。八二年のフランス隊はⅢ峰に登ると共に果洛から雪山郷という所までは車、そのあとは馬と徒歩で八日かかって一周したそうである。

ことしも香港とカナダ隊がアムネマチン山群をめざすほかアメリカの一隊が山麓一周をやるという。「運が良ければ雪豹が見える」が協会の呼びこみ文句で、実際アプローチの途中、雪豹にお目にかかった外国隊もあるそうだ。

青海省の面積は七二万平方キロメートルと日本のほぼ二倍の広さを誇るが、七千以上の山はここにはない。そこで省内の最高峰である布喀達坂（ブクタパン、六八六〇メートル）峰をこし中にも開放する目

的で近く探査活動が行なわれるという。

この山は青海省最西部の新疆ウイグル自治区境に位置し、これまで「莫諾馬哈達坂（モノマハダパン）」と呼ばれていた。一九三二年に登頂したロシア人が自分の名をかぶせて命名したために八二年、中国政府が新しい地図を作る際これをきらってブクタパン（ブク地方の一番高い山）の意という）と改名したのである。新疆、青海の頭文字をとって「新青峰」の別名もある。

西寧から列車で一昼夜走り、ツァイダム（柴達木）盆地の町ゴルム（格爾木）に着く。ここから車で一日半がかりで西北のウトメイレン（烏図美仁）という町まで行き、さらに馬で三、四日かけてベースキャンプ地に着くという。山そのものはあまり難しくなさそうだが乗りつぎその他で青蔵高原を八日半かけて横断する山麓までの行程は面白いだろう。

青海省の持ち味の一つは「江河源」という言葉があるように、中国最大の川、長江（揚子江）と第二の川、黄河の源流の地であることだ。

その二つの大河の源流の山もこし開放される。長江の源流の山は青蔵公路を南に下がり、西藏自治区との省境に近いグラタンド（各拉丹冬、六六二二メートル）、黄河源流の山は、双生湖ツァリンノール、オリンノールの奥にあるヤラダゾ（雅拉達沢、五二二二メートル）。そのいずれも青蔵高原最深部地帯ということで興味深い。

もう一つは、アムネマチンの東南にあるコロ山（果洛山、六二〇〇メートル）である。チベットの伝説の勇将ケサル王と彼の乗る馬の足型が残っている山として、昔から多くのチベットの巡礼たちを集めてきた。雷鳴や銃の音がいつまでも山々に反響音として残る不思議な自然現象から、中国人は「神奇の山」とも呼んでいる。

昨年まで青海省にはいった外国人登山者（トレ

あろう。

これらの実用実験をモデルケースとして、折井さんによって点火していただいた山岳地域における

カタカナの山名・地名山岳用語は

どのくらい正確だろうか

海外委員会

昨年十一月一日、ルームで行なわれた当委員会の第十九回定例講演会では、宮下啓三委員から「おかしな言葉や表記についての反省とその改善のために」という副題のもと標題のような講演があった。当日は多数の方々が出席され、この問題について高い関心のあることが窺われた。

今回はその手始めということ、今後このような集まりを機会あるごとに重ね、できればまとまったものにしたいというのが主催者側の意図であった。

*

外来語として日本で使われるようになるまでには三つの段階がある。第一段階は、直接その外国語が使われている土地でこの言葉を知り、それを日本に伝えた世代。第二段階は、こうやって日本に語り伝えられた言葉を正確に受取って使った世代。そして第三段階は、この言葉がどこから伝わってきたものか、どこで使われているのか知らずに使用する世代である。現在は最後の第三世代により

クリーンな自然エネルギーの実用化の試みを、大切に育てたいと願っている。

これらの言葉が使用されている時代である。

このようにして現在使用されている山岳用語の使用形態を大きく四つに分類する。

一、社会に公認された山岳用語として大衆向けの推理小説などに使用されている例……ザック、デブリ、ヤッケ、ピッケルなど。

二、奇妙で不正確な山岳用語として山岳雑誌や日本の著名な登山家の書いたものから拾い出したもの……

「僕のアイゼンがベルクシュルントにそと置かれた」(ベルクシュルントは割れ目を意味する言葉だから、その上に置くことはできない)

「ハーケンを打ち、ピナを残して……」(カラピナと言うべき言葉をピナと任意に省略して使用している)

「ピパークはテント、シュラフ、羽毛服をいっさい使用せず、自分で作ったツェルト一枚だけを使っただが……」(これはドイツ語で統一するならテントはツェルトに、

海外の山

ツキングや観光旅行も含む)は総計百十八人で、いずれもアムネマチンを対象とした。それがこじ以降、かなり思いきった開放に踏みきろうとしているのは部門、機関を問わず「独立採算」を強力に進めるいまの中国の開放経済政策と無縁ではない。

新たに山を外国人に開放する時の決定権は、中国登山協会ではなく、各省・自治区の人民政府に

アメリカ山岳会アラスカ支部との交換アイスクライミング

青年懇談会

二月九日アンカレッジ着、空港にはアラスカ支部長のアニー・ボーションとネッド・ルイスの両氏が出迎えて来てくれた。この日はメンバーの紹介、日程の説明の後、松本、鈴木はステーション・タニグチ宅に、山崎、中山はデブ・ミラー宅にホームステイすることに決定しそれぞれの家に落ち着く。

十日、アラスカでの第一日目の登攀はアンカレッジ郊外エクルトナ川にあるサンダーバードフォールで四つの滝を登る。スケール一五〇、グレレード二・四級。

十一日、この日はアラスカ・レインジのシーニング・フライト。当初はアンカレッジから飛ぶ予定であったが、都合によりタルキートナからとなった。天候に恵まれデナリ、フォレイカー、ハンター等素晴らしい景観であった。このフライトはK2エイヴィエイションの無料サービスであった。

十二日、アンカレッジ郊外イーグル川での登攀、六ルートほど登りスケール三〇〜一七〇(雪面を含む)、グレレード三・五級。

十三日、アンカレッジ市長

あり、道路、宿泊施設などを十分調査した上で決められるという。

川や湖めぐりを兼ねた五千、六千級の山のトレッキングは、青海省に限らず、今後中国のセールスポイントの一つとなるだろう。「大勢来てもらうためにできるだけ安く」と北京の協会幹部は言っていたが、可能性が広がるのはありがたいことである。(江本嘉伸)

と会見、若い市長であった。山岳会宛にスーベニアをいただく。その後、約七時間のドライブでバルディーズに移動、エンビック博士宅に落ち着く。

十四日、バルディーズ第一日目はキーストン・キャニオンのマッド・スライド(九〇、三級)を鈴木、アンドリュース・エンビックおよび松本、ネッド・ルイスで登攀。十九マイル・ウォールに移動してウシシク(九〇、四級)をアンドリュース・松本と、マティニー(七五、四級)をネッド・鈴木で登る。山崎、中山はバースディ・ボーイ(五五、二級)。ピース・オブ・シット(二五、三級)を八人のアラスカ・クライマーとともに登る。キーストン・キャニオンは風の通り抜ける所で、この日は曇天で風が強く非常に寒かった。

十五日はベアー・クリークで山崎、中山他二名がレイン・チェック(九〇、四級)。アンドリュース・松本がビック・ブラザー(九五、五級)を登攀し、第二登を果たした。ホール・イン・ザ・ウォール・キャニオンでボブ・シュルトン、鈴木がクリスタル・ビジョン(一一三、五級)を登る。

山をきれいにゴミは持ち帰ろう

ツェルトはビバークツェルトにするべきである)

三、おかしい発音の例……

アイス・ステッヒェルをアイス・ステッチェル、コッヘルとすべきところをコッフエルと書き、かばん(コッフエル)を意味してしまったり、ルックザックと言うべきところをリックザックと原語にはない間違った発音をしているものがある。

四、気取りの危険としては、日本語で書けるものをわざわざフランス語とかドイツ語で書くために、かえって誤った表記にしている。

「ウルストをかじって軽い食事を取る」(ソーセージと書けばよいところをドイツ語のウルストを間違えて表記している)

「今日のリコノイザンスの様子では……」(フランス語のリコネサンス(偵察)を間違えて表記してしまっている)

……このようにわざわざ外国語を使う必要がないのに使用し、かえって間違った表記をしてしまった。

更に異った言語の結合の例として、アイゼンバンド、オーバーヤッケ、ザイルパーティー、ダブルヤッケ、トレーニング・ゲレンデ、ライトロングスパッツ、ロックゲレンデ、シュラーフカパー、クレッターシューズ、ザイルオーダーなど登山者が知らず知らず口

にしている異った言語の結合した表記をあげて、このような使用法に疑問を投げた。

その他、フィックスロープ、アドバンスペースキャンプ、チロルハット、セラックなど文法的語尾を無視して使用する例(この場合、アドバンストとすべきなのに、アドバンスドと表記する点に關していくつか意見が出された)。またその場にいらない何を言っているのか解らないような、大幅な省略をした特殊用語の例(ゴア、フリー、ハードフリー、フリー・ソロなど)を上げ現在使用されている山岳用語の乱れの実際を出席者に示した。

この後、質疑応答の時間が持たれたが、リンネ、クロワール、ガリといった同じ意味を持つドイツ語、フランス語、英語の用語が、日本では区別して使われてみたり、ドイツ語のリスと英語のクラックの使い分けがあったりと、現在使用している山岳用語の混乱の状態がさらに浮彫りにされた。

スキーの締め具を意味するビンディングという用語が使われ始めたところ、その用語の使いかたが不適切と考えられていたのに、業者に使われ出してから急速に広まって、定着してしまっただけという例が出席者から出され、用語混乱の原因の一つが解明されたが、それとともに、最近ヨセミテで行なわれている最新のクライミングで使用

海外の山

十六日、キーストン・グリーン・ステップ(二〇級、五級)を鈴木IIブライアン・ティール、松本IIボブが登り、ブライダル・ペール・フォル(一八五級、五級)を中山IIネッドで登る。前のクリスタル・ビジョンを山崎IIジョン・ウィーランドで登る。

十七日、鈴木、松本は写真撮影と休養。中山、山崎他二名でキーストン・キャニオンで新ルートスーベニア(一二〇級、四級)を登る。

郎、大森久雄、勝山康雄、宮下啓三(岡沢祐吉)

山の恥もかき捨てでは困る

手塚 宗 求

学生のころ、山の好きな者(山に登る人)に悪い人はいないと言われていい気分になったものです。事実、私自身も山に登るような人に限って悪いことをする人はいないと信じていました。

昭和三十一年、私は二十三歳の夏、まだ学生気分のままの若さで、とうとう念願の山小屋を霧ヶ峰の主峰、車山の西肩につくりました。

霧ヶ峰、白樺湖を結ぶハイキングコース約八・五*の間に何も無い時代でしたから、まさに大草原の中の小さな一軒家でした。三百メートルも下の沢の水をかき上げて暮す、ランプを灯す山小屋でした。

山の中で暮したいだけという理

由で始めた山小屋での清貧な生活を支えていたのは山男だという自負でした。

しかし思いがけない事実が私の心を傷つけるようになりました。山小屋を荒らす登山者が意外に多いのです。現在記憶に残っているものだけで八件ほどありますが、このほとんどが単なる物見遊山の風体の人ではなくて、ザックを背負い足ごしらえも整った立派な登山家風の人であり、大変なシ

ョックを受けたものです。もつと具体的な事例をあげますと、入口の錠をこわして侵入し、一泊した上に山小屋の中の物品を持ち去って行く人。或る有名私大のワンダーフォーゲル部の場合、男女あわせて約二十名もの人数が

もつと山の歌を

原 真

山岳会の月刊誌『山』八四年十二月号に載った辻庄一氏の「日本山岳会の歌を」なる一文を読んで、賛成の投稿をしようと考えながらそのままになっていた。すると今年二月号に水野勉氏の「日本山岳会の歌について」という文があって、読んでみると辻氏の意見に対する反対論である。

ここで私は、水野氏の意見に反論をし、辻氏の意見に賛成しようと思っているのではない。

日本山岳会の歌を作ったら、それがイデオロギーで会員をひとつにまとめてしまうということにはなるまい。水野氏もそこまでとりこし苦労しなくてもよいだろう。日本山岳会は、イデオロギーなど持ちようなない無思想の会である。機関誌の山岳を読めば、無思想であるどころか、無定見、無節操でさえあるといつてよからう。こんな会で、歌を作ろうなどという提案があったこと自体が青天のへきききであって、まだ日本山岳会が完全には死滅していない証拠であろう。あるいは、これが単なる軽薄なコンテスト趣味なのか局外者にはよくわからない。

しかしこの提案、辻氏のような大先輩から出てきたのだ。せつかくだから、水をささずに、おおいにやってみようではないか。思うに、日本山岳会が「山岳会」と略称するだけでわかりあえたのは、戦前の品格ある紳士によって構成された時期をもって終ったのであり、いまでは「山岳会」といえばわかるような日本山岳会は消滅しかかっている。だから、なんとか伝統の灯を消さないでほしいのだが、その希望は毎日うすれてゆく。今の若者は、あまりに無教養で日本山岳会の何たるかを考える能力もないらしいからである。中年

の会員たちも、いい加減若者におもねるのをやめて気骨を示してもらいたいものだ。そういう思いを込めて、失われてゆく『山の歌』について書きたい。

もう二十年も前の話だ。アコンカグア遠征の準備中、一日、深田久弥、加藤泰安の両氏と長良川上流で落ち鮎を食べたことがあった。その時、泰安氏が、「外国の山へ行くなら、悪いことはいわない。なんでもよいから一曲でよい、みんな歌える歌を作っておくとよい。ソロはまずいよ」と進言してくれたことがある。

泰安氏の真意は言うまでもなく、外国隊と出会ったとき、むこうは、つぎつぎに合唱してくるのに、日本隊はまるで合唱ができなくて、はなはだ具合の悪い思いをした経験がしばしばあったから、日本人もせめて一曲くらい全員で歌える歌を作っておかなきゃ、みつともないということであった。このせめて一曲という言葉に、日本における海外登山の先駆者の一人たる泰安氏の実感がこめられていたと思う。日本の登山家が、歌う能力に欠けているのは昔からのことだった訳だが、最近では、妙なことに状況は更に悪化している。

たしか、氏の『草原森林氷河』の冒頭あたりに、はじめて外国へむかう機中で、知らず知らずに『雪の進軍』をくちざさんでいたというくだりをいまだに記憶している。『雪の進軍』などは、氏の年代の人たちにとっては、心にしみこんだ名曲であったのであろう。今時の若者が、この歌を知らないのは、恥すべき無知もうまいだと私は考えているのだが、それは軍歌なら、なんでも排除する戦後教育のせいでもある。

私は、ソ連でひらかれるバミール国際キャンプに二度参加した。このキャンプでは、参加者が大テントに集まって宴会がおこなわれる。シャンペンを含めながら、歌また歌の一夜である。ここ

入口の南京錠をこじあけて小屋に入り、一泊する準備をしているところを私に発見され、私が嚴重な注意をしたこともありまし。その他、ガラス窓を破って侵入し、飲物やみやげ品を盗みだした大学生などさまざまでした。

右のような例は勿論、小屋を開けて下山したような場合のことですが、記憶に鮮明な事件は昭和三十四年の伊勢湾台風被災の折でした。全潰状態の山小屋の中から、大工道具、双眼鏡、食糧などを持ち出した登山者が何人もいて、この事実から私は山にやって来る人々に大きな不信感を抱くようになりました。

昭和四十一年に白樺湖、霧ヶ峰間に有料道路ビーナスラインが開通しました。

山小屋の近くを車が通るようになって、もつとも憂慮すべき事態は自然の極端な破壊と、誰でも歩かずに山に入るの便利さからくる山小屋荒らしが予想されました。

しかし、どうしたわけか有料道路が開通して以来すでに二十年近くになりますが、私の山小屋に限ってまだ一度も盗難事件や小屋の入口をこわして侵入した例がありません。

こうした現象をここで説明するのが目的ではありませんので省略いたしますが、一つだけ救いと思えるのは、都会地から気軽に短時間で山に入る人が多くなった割

りに、こうした一見、軽薄と見られがちな、車で山に登るドライバーの山小屋荒しが私の周辺では絶えている現実です。

山に登る人に悪者はいない、と今でも私は思っています。そのの、次のような新聞記事を目にしますと、登山者の一人でもある私は肩身のせまい思いをします。

「二月二十六日、大町市のホテルで開いた長野、岐阜、富山三県の北アルプス山小屋協会総会で、ごみの放置、冬期小屋の無断利用など、『下界の常識』では理解できないような、登山者のマナーの欠如の訴えが相次いだ。山小屋経営者の間では『冬期小屋の利用者は、もう客とは思えない。迷惑千万な侵入者だ』『冬山は禁止したら……』といった声まで出、改めて山男のマナーが問題になった。」

ヒマラヤだ、ヨーロッパだと、海外の山を目ざす人の多い日本の登山界と、それを組織している私達一人一人が、根本的に精神登山を考え直す必要があります。



マルバの宿／山本朋三郎

で、日本隊の隊長として、不愉快な経験をしたことがある。日本の若者だけがだまりこくっているで、「何かいせいのいい歌を歌おう」ということになった。日本の歌でいせいのいいのはあまりないので、『箱根の山』にしろといったところ、私の前に座っていた十九歳の若造が、上目づかいにいわく、

「歌詞がよくわかりません」

こ奴らの知っているのは今はやりの演歌なのである。

「演歌は禁止する」

これが海外の山での私の主張だ。私は、私が隊長である限り、氷河のある山へ行つての演歌（とついでにワイ歌）を禁止しているのだ。マイクで拡大しなきゃ聞こえないようなかぼそい声で、一律、どうせ私は駄目なのよという内容の歌詞をくちずさんでどうしようというのだ。氷の峰に挑戦しようとする人間のうたう歌ではない。私は、二度言う、演歌は禁止だ。

こういえば、私のことを水野氏あたりはファッションというであろうか。私は、もち論自由主義者のつもりでいる。問題は自由についての解釈の仕方である。日本山岳会の歌をつくれば、それがイデオロギーで会員を画一化することだと思っている人の立場からすれば、氷河の山で演歌を禁止するのもファッションになるかも知れない。私が演歌などというものの価値を、少くとも山の歌として認めていないのは、一定の理由があつたことだが、それについての論考はおくとして、要するに最近の若者たちは、山の歌そのものを知らないのである。無知だから演歌ぐらいいしか歌えないのである。

余談になるが、エリッヒ・フロムの『自由からの逃走』などの解釈も、水野氏と私ではちがつていろいろらしい。山岳会の歌ができて、みんなでそれを合唱すれば（そんなことがあるとも思えない

が、あると仮定しての話だ）それが『孤独感とか疎外感からの解放』という過程を経て、結局フロムの言う『自由からの逃走』となるという論法だ。論としてはたしかにそういう言い方もできるが、それは抽象論であつて、現実の論は、別だと私は考へている。

現実の論法でゆくところなのではないか。電機メーカーの操作によつてもたらされたカラオケブームは、大衆を受け身にし、大の大人が未熟なナルシズムにひたり（そのなげやりの歌詞をみよ）、そして、何よりもその非音楽的な退行現象によつて健全の気風を見失つてゐることだ。つまり、カラオケブームとは、大衆というなまけ者が、資本家の術中にはまつて、利己主義のうさ晴らしにおぼれてゐる現象で、これこそ『自由からの逃走』現象である。

カラオケ（何といやなひびきか）に比較すれば、合唱の方がよほど健全であり、積極性を必要とし、努力の裏づけもいる。もつとも水野氏は、カラオケについてふれてゐる訳ではないから、この部分は、私のカラオケ観として読んでもらいたい。私の主題は、カラオケを排して合唱をとる立場であることを言うための順序として、カラオケにふれたまでだ。

イデオロギーでひとつにまとめてしまふことと、国歌や山岳会歌の制定とが、必ずしも直接の関係があるとも思えない。日本山岳会の歌ができたなら、四千人の会員が受動的に同じ考えで行動するという論法には飛躍がありすぎる。山岳会の会員がその程度の人間たちなら、会歌を作ろうが作るまいが、どっちも希望はないのだから同じことだ。

むしろ、会歌を作つても、それがいい歌なら山岳会のわくをこえてみんなに歌われるであらうし、つまらん歌なら、誰も歌わないで忘れられることだらう。私は、それならそう期待したいし、



図書紹介

続・大雪山わが山

—小泉秀雄

清水敏一編

「山」四五五号（一九八三年五月号）に「大雪山わが山—小泉秀雄」を紹介しておいたが、続編も記しておこう。

小泉秀雄は明治末期に旭川の上川中学の教諭となつてから、大雪山に地質、植物調査のため登山を繰り返して、「山岳」に登高記や論文を発表した。大正十五年には大雪山調査会から「大雪山登山法及登山案内」を発行し、まさしく大雪山の先覚者であり、大雪山中の白雲岳と赤岳の間に小泉岳と命名されている山もある。昭和九年に大雪山国立公園に指定されたときに、功労者として表彰を受けたこともあった。

後年、長野県に転じてからは、その足跡はあまり知られていなかった。編者はその業績を讃えんがため、研究業績や植物採集の登山歴を調べ上げて、昭和五十七年に正編を発行した。

発行後の反響は大きく、多くの読者から感想や意見、思い出話や新しい情報、資料の提供を受け、編者がその後収集した資料と共にまとめ、今回続編として発行した。

小泉は登山家ではなく植物学者で、彼の登山は学術調査であり植物採集が目的で、採集標本から編者がまとめた登山歴からも、研究一徹なところがうかがえる。高山植物の呼称にしても、高山植物は高山のみならず、寒地においても見られ、これは高山は寒地と同じ条件の元にあるので、高山植物は本来寒地植物であると、高山植物の名称を用いなかっただけで、むしろなすける。

資料として「日本南アルプス（赤石山系）の遺存寒地帯」の論文がある。また得意としていたスケッチも、小泉家に残されている「動物植物画帳」（明治二十八年）「習画帳」（大正元年）からいくつか転載し、親しみのある一面をうかがわせている。

目次の構成は追補、資料、回想、余瀛の四章から成つており、寄稿された手記、伝記も併載されている。

正統二巻を通じて小泉秀雄の全貌がくみ取れる貴重な資料である。編者が私費を投じて、執念の追跡調査で作りに上げた労作に讃辞を送りたい。

A5判 二三六ページ 昭和五

水野氏もそう考えておられるようだ。それなら会歌制定反対などというブカードめいたものはおろしてもらいたいのだが、いかがなものであろうか。ちなみに、辻氏は、山岳会歌の制定などという、いかめしい単語は使っていないではないか。これは、単に、山岳会何十周年記念行事としての、山の歌のコンテストであるにすぎない。あまり、おかげさうけとすることもあるまい。いい歌ができれば、それだけでもうけものくらいに受けとればよい。

私の提言を書こう。

『山岳会の歌』を募集するのは、それなりに何もしないよりはよいとして、本当に必要なのは、いい『歌集』を編集することだと思う。歌う歌がきまっていなければ、一緒に歌うこともできない道理。むしろ、いい歌集がないから、合唱ができないのである。これが根本の問題だと、私はかねがね考えてきた。一曲の山岳会歌を作ったくらいで、山の歌を合唱する気風がおこると思えない。『日本山岳会歌集』これこそまさに制定してもらいたいものである。

歌を忘れた若者たちに、無知でしられた意気地

十九年四月十日発行 私家版
定三〇〇部 北海道岩見沢市緑
ヶ丘五丁目一六六 清水敏一
定価二、五〇〇円 送料三〇
〇円 (高澤光雄)

写真集

ふるさと 鳥海山I

村岡謙治著

酒田から毎日眺める折々の鳥海山にひかれて登山を始めたという

のないう若者たちに、このくらいの歌は覚えておけ、といえるような歌集である。それこそ日本山岳会として払うべき努力の方向だと思う。

私は、山の歌を合唱しようという辻氏の意見には賛成なのだが、主張の仕方がひかえ目にすぎないように感じたのだがどうであらう。今時の若者が歌えないのは、歌を知らないから歌えないのである。『まもれ権現』(慶応)も、『山の四季』(北大)も『遭難の歌』(早稲田)も根っから知らないのだから歌いようもあるまい。ましてや『グリンデルワルダリード』や『ノルマンディー』や『アプシード・フォン・ベルゲン』においておやである。

若者は、彼らの意志において歌わないのではない。彼らの無智、つまり無能力によって歌えないのだ。むしろ、あわれというべきであらう。国際的な登山家の交流の場へゆけばこのことは歴然としている。

こういう若者に、大人たちはおもてはならないと思う。辻氏の発言、もっと強力であってもよかったといいたくはない。

著者が、『アマチュア・カメラマン』の目を通して四季折々の鳥海山を撮り続け、第一冊目として出したのが本書である。カラー七二枚、モノクロ六一枚

が、

「仰」わがふるさと、「生」春

のいづき、「飲」雪を踏んで……

夏へ、「讃」花咲く道を・小さな仲間達、「祈」信仰の道を

――北川、「形」雪のメルヘン、「祈」信仰の道を――蔵岡方面、

「彩」秋の装い、「厳」半日の晴

以上構成になる本書には、鳥海山をさまざまな角度から紹介しようとする意欲が感じられ、その意味ではひとつの役割を果たしているといえる。

発行していないことと、できればIIを作って鳥海山の素晴らしさを報告したい」と言う著者の第二作には、造本やレイアウト、モノクロ写真の仕上げのシャープさ等に一層の工夫を期待すると共に、比較的撮影枚数の少ない百宅口方面の紹介も望みたい。

ふるさとにこれだけ打込める山をもつ著者は幸である。鳥海山に限らず、登山の対象としてあまり知られていないふるさとを山をテーマにした新鮮な書物がより多く出版されることを心から望みたい。

A2判(27×40) 六八ページ
昭和五十八年十一月発売
元(株)六兵衛館(鶴岡市大山三
一四三一一三) 定価 三八〇
〇円 (滝川 清)

生涯楽しめる

山歩き山登り

小倉薫子著

著者の小倉薫子さんは、今までも『女性登山教室』など登山の入門書をはじめ、海外の旅行記など何冊もの本を出している。雑誌編集、記者のキャリアもあるだけに読みやすい楽しい本になっている。

目次の見出しをみているだけで「生きている実感を味わう。道草の大発見。作る、食べる醍醐味。」

歌う、笑う、おしゃべりの爽快感」など……山登りって楽しいんだなあ、良いことがいっぱいありそうだなあ、ようし始めてみようか、という気になってくる。

これから山歩きをはじめようとする人のための入門書なので、懇切丁寧に計画のたて方や装備のことなど書いてあるが、そういう実際的なことだけでなく、いかにトータルに山を楽しむかということについて、著者が今まで何十年か山登りを続けてきた集約的なものが出ているので、既にある程度山を歩いている人たちにとっても参考になることが沢山あると思う。

著者はアサヒカルチャーセンターの「女性のための登山入門教室」の講師を十年ほど続けていて、約二千人ものいろいろな人たちと山登りをしてきたが、そこでの体験から、特に「自分でプロデュースする」ということを強調している。中年になって、子供たちも巣立ってゆき、いづれか時間とお金の余裕も出来、健康と老後の楽しみにと山歩きを志向する人、特に女性がふえているが、誰かに連れていってもらわなければ入っても、ただ集合場所に行っただけで、という人たちが多く、それでは本当の山歩きの楽しさを十分に味わっていない、ぜひ人に頼らず自立して、計画の段階からあらゆることを自分で作りあげてゆく楽しさをもと説いている。

とにかく山登りは、こんなにもいろいろと楽しみがあり、生活に役立ち、人生の勉強にもなり、まさに「生涯楽しめる」ことである、と言う本で、山仲間土崎頼子さんのイラストも楽しい。

一九八四年八月三日 文化出版局発行 二一六ページ 定価九八〇円 (川井秋子)



東・西 南・北

第三回

木暮理太郎翁

碑前懇親会へのお誘い

恒例の懇親会を左記要領で開きます。会員多数のおいでをお待ち申し上げます。

講師 大井正一氏
〔昭和六十年一月十日(木)、日本山岳会ルーム〕

雲の見方 中層雲は 0°C からマイナス 30°C までの過冷却水滴より成り、高積雲(うろこ雲)と高層雲(おぼろ雲)も、から成っている。高積雲は巻積雲と同じだが、かげがある。ベナルセルが大きい。日月が半径二・五度のコロナをつける。彩雲等の点で見分けがつく。一般にレンズ状、層状をしている。これに対し、高層雲は日月がスリガラス状に見え、間もなく雨になる。

熱力学 コップに水を入れ、その中の水蒸気の示す圧力を水蒸気圧 e 、蓋をした時の圧力を飽和水蒸気圧 E としたばあい、 e/E を ϕ で示したものを湿度という。 E としてはマイナス 30°C まで、過冷却状態の水蒸気圧を用い、水蒸気圧は使わない。 E は温度 T だけの関数で大気の圧力 p とは無関係である。

熱力学第一法則によれば熱気泡は上昇するとき膨張して仕事をし、その分だけ、百 μ につき 1°C の割合で冷却する。この値を r_d 乾燥断熱減率という。上昇する際に水蒸気が凝結し雲粒となる場合、(雲の中)では凝結熱が出るために、百 μ につき 0.5°C しか冷却しない。この値を湿潤断熱減率 r_w と呼ぶ。 r_d と r_w に対し、実際に気温が高さ

とともに減っている割合を単に減率 r で表わす。大気中の任意の層について、 r が r_d より小さい場合には、その層の中の気塊は上下の仮想変位を与えても、その気塊は元の位置に戻ってしまう。これを安定という。逆に r が r_d より大きいと仮想変位を受けた気塊は元の位置に戻らなくなってしまう、対流が起きる。このことを不安定という。 r が r_d に等しい時は中立という。

気塊が上昇するとき、不飽和の間は r_d で降温する。雲が出来て飽和となれば r_w で降温する。然し下降にあたっては、何れの場合も r_d で昇温する。従って気塊が山を越えてから下り、山の手前で雲が出来れば、気温は、始めより高くなる。これをフーン現象と呼ぶ。夏に関西や裏日本で異常に暑くなるのはその一例である。

出席者 深野良夫、深谷 論、長谷田茂雄、石井恵美子、前野十行、南川金一、三栖寿生、松丸秀夫、中川和道、中村純二、大木淑子、大森弘一郎、斉藤かつら、重村 清、高橋 詢、梅野淑子
お知らせ 気象講座に出席できない方のために、プリントをお送りします。希望者はプリント代(一〇〇円切手×回数)郵送料(六〇〇円切手二枚)を同封の上、左記宛ご請求下さい。〒165 中野区若宮3-14-13 大井正一 (中村純二)

科学研究委員会

記

日時 五月十八日午後四時より
場所 山梨県北巨摩郡須玉町金山平、有井館 TEL 0551-455-0455

交通 中央線韮崎下車、増富温泉行きバス終点下車、徒歩一時間半。タクシーあり。

費用 懇親会、宿泊費、記念山行費をふくめ一人八千円

行事 碑前祭、懇親会、翌日は牛奥雁ヶ腹摺山(大菩薩南嶺、一九八五 μ)登山

申込 〒400 甲府市武田三丁目六一二七 山村正光 TEL 0552-51-3175

締切 五月十三日 定員四十名

写真展 私の雲取山について
主催・出品 新井信太郎(会員・報告)

佐々保雄会長を囲む
青森、道南地区会員の談話会

一九八五年三月十日、世紀の大工事と謳われた青函トンネルが貫通した。佐々会長は永年にわたって鉄建公団の青函トンネル技術調査委員会の委員として活躍してこられたが、同トンネルの貫通式に出席のため、去る三月九日夕刻来

雲取山荘管理人) 会場・会期 秩父市矢尾百貨店 85・3・14/18

奥秩父の雲取山荘管理人として、三〇年間も山荘生活にあけくられた新井さんが、ここらで一くぎりつきたいと個展をひらいた。年間無休の山荘経営三〇年は、容易なことではないが、暇をみては余技のシャッターを押した。その收穫から選んで四十八点の全紙大カラー印画を、額におさめて展示した。一巡してその美事に圧倒されたが、春夏秋冬の雲取山中にいま吾在るがとき思いに、憩うことができた。これだけの写真

は、新井さんだから撮ることができたのだろう。地方の小都会での個展では惜しい。大宮・浦和・東京でも、多くの方の観賞に恵まれればなアと思った。(柿原謙一)

函された。そこで、これを機に青森と道南地区に在住のJAC会員と会長をめぐる関係者らが相集い会長をお迎えして標記の談話会を函館の法華クラブで開催した。佐々会長は就任このかた地方支部活動の活性化に随分と尽力されてきたが、その意をうけてこのたびの談話会では平素どちらかという和交流の少ない青森地区の会員にも参加を呼びかけた。幸いむつ市から松島静吾氏(六一九三)がか

けつけて来られ、弘前の根深誠氏

洋書購入のお知らせ (つづき)

図書委員会

16. **Edwards, Amelia** 1890
Untrodden Peaks and Unfrequented Valleys,
George Routledge & Sons, Glasgow, 389 p, 22.5 cm
17. **Evans, John** 1966
The Conways—A History of Three Generations
Museum Press Ltd., London, 308 p, 22 cm
18. **Forbbs, J.D.** 1848
A Physician's Holiday: A Month in Switzerland.
John Murray, London.
19. **Fox, Joseph H.** 1908
Holiday Memories
Privately Printed, L. Tozer & Co., 147 p, 27 cm
20. **Freshfield, Mrs. Henry** 1862
A Summer Tour in the Grisons and Italian Valleys
of the Gernina
Longmans, Green & Co., 292 p, 20 cm
21. **Freshfield, Douglas W.** 1914
Unto the Hills
Edward Arnold, London, 119 p, 18 cm
22. **Girdstone M.A., Rev. A.G.** 1870
The High Alps without Guides
Longmans, Green & Co., London, 327 p, 20.5 cm
23. **Gilbert, Josian** 1864
The Dolomite Mountains
Longmans, Green & Co., London, 576 p, 20.5 cm
24. **Gregory, Alfred** 1954
The Picture of Everest
Hodder & Stoughton, London
25. **Gribble, Francis** 1899
The Early Mountaineers
T. Fisher Unwin, London, 328 p, 22.5 cm
26. **Hadie, Norman** 1957
In Highest Nepal
- George Allen & Unwin Ltd., London, 191 p+16 ill.
27. **Harrer, Heinrich** 1953
Seven Years in Tibet
Hart-Davis, London, 288 p
28. **Harrison, Frederio** 1908
My Alpine Jubilee (1851-1907)
Smith, Elder & Co., London, 141 p, 19.5 cm
29. **Hinchliff, Thomas W.** 1857
Summer Month in the Alps: with the Ascent on
Monte Rosa,
Longmans, Brown, Green & Co., London, 312 p, 19 cm
30. **Hudson, Charles** 1856
An Ascent of Mont Blanc
Longmans, Brown, Green & Co., London, 143 p+24,
20 cm
31. **Irviug, R.L.G.** 1940
The Alps,
B.T. Batsford Ltd., London, 120 p, 21.5 cm
32. **Irving, R.L.G.** 1940
Ten Great Mountains
J.M. Dent & Sons Ltd., London, 213 p, 21.5 cm
33. **Irving, R.L.G.** 1955
A History of British Mountaineering
B.T. Batsford Ltd., London, 240 p, 22.5 cm
34. **Javelle, Emile** 1899
Alpine Memories
T. Fisher Unwin, London, 444 p, 21 cm
35. **Krawczyk, Chess** 1977
Mountaineering: A Bibliography of Books in English
to 1974, The Scarecrow Press, Inc., Metuchen,
N.J., 180 p, 21.5 cm
36. **Kugy, Dr. Julius** 1934
Alpine Pilgrimage John Murray, London, 374 p, 22 cm
37. **Kugy, Dr. Julius** 1938
Son of the Mountains: The Life of an Alpine Guide,
Thomas Nelson & Sons, Ltd., London, 198 p, 20 cm

(以下次号)

(八三〇二)は残念ながら直前に
なつて不参加となつた。佐々会長
からトンネルが開通すると訪函の
機会も少くなるが、青森、道南地
区会員の活動、交流が発展するこ
とを願う、とのあいさつをいただ
き、松島会員の音頭で乾杯。自己
紹介を兼ねて市根井会員(七九〇
五)から同氏が永年にわたつて撮
り溜めてこられた大雪山風景の写
真展開催について案内があり、井
上直一北大名誉教授は佐々会長と
トンネルの海底地質調査をやつた
当時のななしや「デア・リンデン
バウム」の独唱披露があつた。ま
た、宮原氏(北大探検部)はヒマ
ラヤ、メラピークに遠征した折の
会長の健脚振りを語られるなど話
題は尽きず、最後に先般のヨーロ
ッパ旅行での会長撮影になるスイ
スの山々のスライドを観賞した。
定刻を大幅に超過したあと、トン
ネルの地質調査を共にされた押手
敬北教大名誉教授の乾杯でしめく
くり、再会を約しつつ二次会へと
散つた。今回の談話会を機会に青
森から松島氏の参加を得、今後同
地区会員の方々との連携を発展さ
せる足がかりの得られたことは大
きな収穫であつた。

なお、当日の参加者は以下の各
氏であつた(敬称略)。
佐々保雄、松島静吾、市根井孝
悦、久保田優一、横田春雄、増田
宜泰、稲垣正策、桜井仁、河村章
人、河村哲子(以上JAC)、井

高山忠四朗氏 名誉会員祝賀会

信濃支部

今年は信濃支部始まって以来の
嬉しい出来事があつた。昨年十二
月二日、本周年次晩餐会におい
て、当支部元支部長、現本会顧問
の高山忠四朗氏が名誉会員に推挙
され、その記念祝賀会が一月二十
七日に催されたことである。

一九七三年アンナブルナI峰
(十二年前の報告書出版祝賀会と
合わせて行なわれたこの祝賀会は
会員四十五名の参加を得て、再三
遠慮される高山氏を説き、松本第
二東急インで盛大に行なわれた。
十五年間の支部長、県山岳協会
の設立ならびに初代会長 JAC
上高地山岳研究所の建設など、氏
が県内外の山岳界に尽くされた功
績は誰もが認めることである。う
氏にとつても支部にとつても大変
名誉なことである。

謙虚に回顧し、お礼を述べられ
た高山名誉会員が、明日もまた山
靴の音を響かせ汗する姿をわれわ
れは望んでいる。八十三歳のお体
にはその自信と体力がみなぎって
おられるのをわれわれは確信し
た。
(中野和郎)

上直一、押手敬(以上トンネル関
係)、沢田洋一、宮原裕樹(以上
北大探検部)。
(河村章人)

ルーム日誌

三月

7日(木) 海外委講演会

8日(金) 理事会

11日(月) 図書委

14日(木) 科学委気象講座

15日(金) 新入会員オリエンテーション

16日(土) 山岳史懇談会

18日(月) 評議員会

19日(火) 婦人懇談会

20日(水) 指導委、八十周年展委

22日(金) 会報委、科学委

25日(月) フィルム委

26日(火) 自然保護委

29日(金) 婦懇セミナー

今月の来室者374名

会員移動

支部変更

5938 佐藤 節子(越後)

退会 山形支部へ)

7146 西野間 幸雄

名義変更

2842 新潟県高校体育連

盟登山部・筑木

力へ

4120 新潟電話局山岳部

↓奥山 誠一へ

物故

8234 下谷範雄(1・28)

1835 山崎安治(3・11)

3397 吉川 公孝(2・20)
夫婦会員へ7416 寺本 正史
8814 寺本 孝子(旧秋元)

八十周年記念事業第二次募金応募者ご芳名

(昭和六十年四月十五日まで、敬称略、順不同)

(一〇〇) 佐藤春郎 早川種三

百瀬舜太郎 桑原武夫 (八〇)

吉村健児 (六〇) 交野武一 長

嶋正浩 渡辺宏之 小林太刀夫

(四〇) 川又恒一 片岡 博 金

山淳二 佐々木弘二 高橋早苗

武村市太郎 柴田均二 広谷光一

郎 島田 翼 湯浅道男 山県

浩 山口節子 山寺仁太郎 後藤

泰治 滝 和美 川森左智子 細

川沙多子 (三〇) 神保信雄 塚

本 茂 早川義郎 (二〇) 難波

隼象 樋口光久 原田達也 原田

武司 浜野吉生 荻原賢司 村井

米子 室 次雄・光子 三宅健治

郎 水谷弘治 前田菊太郎 岩崎

三郎 大山昭一 柴崎 徹 永井

俊三 上尾庄一郎 大洞陽一 伊

藤紀克 伊藤久行 石井康夫 長

塩憲司 土井高夫 田 仁代 塚

原道夫 曲田 均 牧野牧夫 保

科文人 藤原武夫 関 昭一 佐

藤弥右衛門 渡辺良一 仁平悦雄

百瀬 孝 橋本誠二 山岸猛男

木戸繁良 鳥居寿興 山崎 徹

渡辺敏夫 横田敬一 吉田 満・

三智子 山崎 健 山本良子 山

田博茂 井口謙司 磯野兼二郎

織田 収 岡本如矢 沢村幸蔵

神津得一郎 熊谷とも子 久野英

一郎 木皿 謙 菊池修身 笠

原潤二郎 片桐理一郎 辻井達

一 高尾徳繁 高岡周夫 高橋

定昌 立平宜雄 高橋一雄 須

沢春雄 杉浦雄治 白鳥健二

白子広兵衛 渋川昭市 根本

紀 沼田 真 西原幸子 西信

博 広島三朗 長津葛尾 中河

与一 山本敏三 秋野子弦 浅

野清彦 赤羽孝一郎 若沢俊雄

小池良吉 小林治俊 見学 玄

新妻 徹 熊谷太三郎 清野

務 清野 恒 重村伝平 篠田

軍治 上善峰男 佐藤芳久 佐久

間惇一 石川治郎 奥山文次 小

野 庸 大久保成幸 寺村栄一

津田康祐 茶谷東海 千谷壮之助

橋 真琴 竹内 孝 高見悦子

田中壮佑 佐藤晴夫 佐藤兼治

中島 宏 西沢健一 中村テル

久保孝一郎 山崎直人 菅沢豊蔵

植田佳徳 戸谷 翠 佐伯久雄

中村 義 岡野谷 誠 東原 進

葛西森夫 関山温子 浅輪幸久

(一口) 湯川龍二 矢野 真 安

間 莊 赤松 光 淡川舜平 有

馬 純 秋元常夫 赤石喜恵子

小荒井 実 小宮忠義 菊池 洋

木村利雄 北出箕吉 関 孝治

諏訪 武 鈴木英一 島尾久子



会報、報告書、名簿、自費出版の製作承ります。

目生々文献サービス

東京都渋谷区千駄谷3-13-22 電話03(478)4062



☎ 234-6659

この電話で
もお知らせ
しています

●第九回若葉会山行

山々の緑も一日と色濃くなつてまいりました。恒例の山菜の味覚を楽しむ山行を左記のように企画いたしましたので、ふるってご参加下さい。

場所 会津 猫魔ヶ岳
集合 五月二十四日(金)二十二時 新宿スバルビル前

宿泊 高郷山荘
費用 会員一万七千円、非会員一万九千円

申込 山岳会事務局へ
▼なお山行に先だって、五月十四日(火)十九時より山菜勉強会を開きます。

講師 片岡 博(七四九七)
松本英一(七八六五)
諏訪 武(八九〇四)
場所 ルーム
会費 八〇〇円
集委員会

22日(金) 会報委、科学委
25日(月) フィルム委
26日(火) 自然保護委
27日(水) 中国登山隊ミーティ

ング
今月の来室者 32名
会員移動

●山研の開所は

四月二十七日

開所の日時は表記の通りですが、積雪などの程度で、多少ずれる場合も考えられます。正確な日時は事務局で確かめて下さい。なお宿泊費などは据置きです。

山研委員会

●昭和六十年年度通常総会

五月二十四日(金)午後六時より私学会館で行なわれます。詳細は後日お知らせいたします。

総務委員会

●創立八十周年

記念晩餐会(仙台)

新緑の仙台で、岩手、宮城、福島、秋田、山形支部共催で次の通り開催いたします。

記

日時 五月十一日(土)
午後二時三十分より
会場 ホテル仙台プラザ
行事 一、講演会 二時三十分
「日本山岳会八十周年記念カンテンジュンガ初

物故
4940 山崎 秀直(10・17)
8041 道向 和子(2・9)
395 藤山愛一郎(2・22)

退会
47801 飯田 栄一
4768 陰地 章

縦走(重広恒夫氏)

映画 「エベレストへの道」

二、晩餐会 五時三十分

BGMは著名楽団による南米民俗音楽

会費 一〇、〇〇〇円(宿泊代別)

宿泊は近くの施設で、税込み五、五〇〇円

申込先 〒982-02 仙台市茂庭字中ノ瀬五一十四

日本山岳会宮城支部

佐々木豊喜

(TEL 023-81-0036)

●創立八十周年

記念晩餐会(越後)

日本山岳会八十周年と同時に、越後支部四十周年にも当り、新緑薫る六月、山岳会創立発起人、高頭仁兵衛翁ゆかりの地、長岡市において次の通り記念晩餐会を開催いたします。

記

日時 昭和六十年六月十五日、十六日
会場 北越銀行本店ホール(国鉄長岡駅より徒歩五分)
行事 一、六月十五日(正午集合)

長岡市厚生会館にて

(1)記念式典 永年会員表彰

(2)記念講演 講師 西堀栄三郎

(3)支部会員作品展示会 茅原 一也

(4)高頭仁兵衛翁墓参

(5)晩餐会 午後六時、ホテル東泉閣(長岡市柏町) 全員宿泊

二、六月十六日

(6)記念山行 八海山(日程)

東泉閣バスより六日町へ八海山ゴンドラへ徒歩約三時間八海山へ下山し新幹線浦佐駅 午後五時解散

会費 一〇、〇〇〇円

(宿泊、晩餐会費とも)

ただし、記念山行参加者はバス代、ゴンドラ代等を含め約五、〇〇〇円は別途

申込み、照会

四月末までに次のところへ照会、申込み下さい。

越後支部 新潟市営所通一

学生書房 025-23-9870

日本山岳会 02-361-4333

なお、詳細は別途に各支部長あて案内を差し上げてあります。

(鈴木敏雄)

1985年7月26日(金)～8月9日(金)15日間 ソ連・カフカスの山旅 第7回

- 名峰エルブルース山(5,633m)登頂
- 5,000m級の峰々のアルペンスキー
- 3,000m級の氷河トレッキング
- 高山植物の観察・スケッチなどフリータイム!
- 新湯ーハバロフスク(1泊)ーイトコール(10泊)
- ーモスクワ(1泊)ーハバロフスク(1泊)ー新湯

(株)日ソ旅行社 政府登録一般第98号

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷1-20-1
パークアベニュービル
☎404-1751(代)

案内書呈

編集後記 今月の会員懇談会は、「箱根古道を歩く懇親山行」。この日は快晴で、参加者全員、渡辺正臣さんからはエーデルワイスの葉、佐々会長からはスイスのチョコレート、そして美味しい豚汁と結構ずくめ、小生、久々に山岳会費の元をとった気分でした。(岡)

昭和六十年四月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五一四
サンビュウハイム四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行人 佐々保雄

編集代表 岡 祐吉

電話東京(03) 四四三三

振替口座東京三一四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技報堂